

〔趣旨説明〕

都市・村落論再考

——時間と空間を超えて——

溝 口 常 俊

「あらかじめ企てた訳でもないのに、一種の知的「移動撮影」^{トラベリング}が、私をブラジル中央部から南アジアに連れて行った」というレヴィ＝ストロースの一文（川田順造訳『悲しき熱帯』中央公論社、1977、222頁）の空間を超えた観察の妙に知的興奮を覚え、また「一直線に走り、直角に交わっている街路、公衆浴場、水路網、下水。快適さが保証されてはいるが趣のない住宅街。そんなモヘンジョ・ダロとハラッパは、そこを訪れる人に、アメリカ近代の大都会の長所と欠陥を思い出させる（一部筆者改変）」（同書200-201頁）、とした同氏の時間を超えた考察に、私は感じ入ってきた。

1998年「都市・村落論再考」のシンポジウムの座長を引き受けるにあたって、最大の悩みは如何なる柱を立てるかであった。歴史地理学会会員で都市あるいは村落を研究対象にしていない人はいない。だからどなたに何を話していただいてもシンポジウムは成立する。そういう点では気楽であったが、しかしそれでは焦点は定まらない。それに、今回は昨年の歴史地理学会創立40周年の記念大会で打ち出された「都市・村落論再考」を継続、完結させねばならない節目の大会である。第1回大会で「本質と方法」、第20回大会で「再び歴史地理学の本質と方法」と20年サイクルで方法論が議論されてきている。今回も何か方法論を打ち出さねばならないのでは、というプレッシャーがあった。

そこで、個人的に企てたのが副題としての「時間と空間を超えて」であり、言い換え

ば「比較史の遠近法」である。古代の千田稔、中世の前川要、近世の岡村治、そして近代の野間晴雄の諸氏に依頼することで時間をおさえ、かつ野間氏には空間を飛んで東南アジアを題材にさせていただくようお願いした。加えて発表者各位には「それぞれの歴史地理学方法論を披露した上で実証研究を展開していただけないか」、という無理な注文を試みた。しかしこれはあまりにも難題で「方法論は聞き手に読みとっていただくことにして自由に発表させてほしい」という声が届き、そのように実行した。

私個人では時間と空間を超えた研究などとうてい出来ないから、複数の研究者の発表をつなぎ合わせてそれに替えようとしたわけであるが、うれしい誤算があった。千田氏は「日本における田舎の成立」という演題で、古代だけでなく聖一俗、蔑視という観点から一挙に現代にまでわたる時間を超えた議論をされたし、野間氏は東南アジアの全域、及び沖縄までの都市とその背域を比較検討された。1人の力で時間あるいは空間を超えた研究が出来る可能性が与えられ勇気づけられた。また考古学者として都市性を考え抜いた前川氏、都市を形成する市商人（エイジェント）に注目した岡村氏からは、地域比較のキイを提供していただいた。

もっともこうした注目の仕方は個人的な見解に過ぎず、聴衆者、読者に知らされているのは「都市・村落論再考」のみであり、関心は演者が如何に都市村落論を展開するかにか

かっていた。そうした観点から言えばコメントターの伊藤寿和、藤田裕嗣、中村周作および山下清海諸氏の指摘はするどい。ピックアップ的にその一部を紹介すると、伊藤氏は千田氏の「現代とは異なる古代の価値観に基づいた空間構造の復原や解説を、我々は真剣に心がけてきたか否か」、および「これまでになされてきた古代の日本に関する歴史地理学の大半は、畿内および律令国家体制を中心に据えた中央史観に基づいた古代の空間構造の復原と解説に終始してきたのではないか」という見解に大きなショックを受けたとしている。藤田氏は前川氏の考古学的な手堅い発掘による実証的研究に刺激を受けつつも、例えば地割りの復原とその解釈については歴史地理学的方法が有効であるとのアピールを忘れていない。中村氏の岡村論文に対する要望として「市の風景たる喧騒、賑わいについて言及する必要があるのでは」という指摘は従来の都市村落論を超えた範疇にあるだけに、興味深い。山下氏は野間氏の発表にさいして「東南アジアの都市・村落の歴史地理学的研究において、碑文や古代の史料の解説・分析に優れた歴史研究者に、地理学研究者が挑戦するのは容易ではない」としつつも自然環境と人間生活との相互関係に関心が高い地理学研究者の存在価値は多いにあり、周辺地域や他地域との関係を重視した野間論文を評価している。

さらなる詳細は本紙上に譲るとして、ここでは発表者の提言を横断的に眺めてみたい。千田氏の聖一俗論は前川氏の都市の町屋の配置、岡村氏の市場における市商人の配置、野間氏の異民族の集合する東南アジア諸都市での棲み分けなどについて考慮すべき観点でもある。また、都市の発展図式に注目すれば、前川氏の居館化と都市化を如何に整合性を

もってとらえるか、あるいは岡村氏の市場町の形成過程と都市発展とのからみを如何に説明するか、という問題は野間氏の東南アジア諸都市の形成を論ずるときにもヒントになる。都市、村落の関連性について言えば、野間氏は背域という概念を提出して都市と村落の連結性をうたっているが、陸地（村落）に限定せず氏が強調していた海域ネットワークをも背域に入れるべきであろう。こうした空間論も、一旦エイジェントに注目すれば、たとえ景観的に城壁があつて都市が区画されていようと、都市と村落を分けて考えることは出来ない。例えば江戸時代において江戸の有力商人の多くは地方の寒村の出で、江戸の店は出店にすぎず、本店は出身村においていた。いわば村で江戸をコントロールしていたともいえる。もはや都市論（都市地理学）、村落論（村落地理学）はそれぞれ単独では成立しないと、はっきり認識しておく必要がある。

さて、再び冒頭の私見にもどり、時間と空間を超えて何が残るのか。歴史性と地域性が無くなってしまうのではないか。いわずもがな、これが構造主義の最大の弱点でもあり、われわれはこれを克服せねばならない。いわば「時間と空間を超えて」を超えなければならない。地理学の分野で従来得意としてきた「地域構造」論、それらは少々歴史的考察をなおざりにしているようにみうけられるので、それに「史」点を入れて「地域構造史」論を展開することに一つの活路をみいだせるのではなからうか。それは、一方においてアナル学派で「構造史」研究がさかんに力説されていることからの刺激でもある（ピエール・トゥベール／佐藤彰一訳「中世地中海世界の人間と自然環境」『思想』1998、143-162頁）。

（名古屋大学文学部）